

## 統一新羅時代の四天王像に関する図像学的考察

陸 載和（武蔵野美術大学）

韓国において四天王が造像され始めた時期は、現存作例から考えると7世紀後半すなわち新羅が三国を統一した以後であると思われる。それ以前に遡る四天王の造像例は文献および現存作例からも見出すことができない。しかし、7世紀後半以後、韓国では四天王像を舍利容器や石塔、石灯、浮屠、金剛鈴などに設けるようになり、数多くの作例が確認される。また、そのほとんどの作例は4体全て揃うものが多く、中国の現存作例が2体のみをあらず二天形式のものが多い現状を考えると、それらの作例は初期四天王像の図像を考察する際に重要な資料であるといえよう。

韓国の四天王像の中で初期に属する作例としては、錫杖寺址出土塑造多聞天像片（7世紀後半）や感恩寺址東・西三層石塔出土舍利容器外函における四天王像（8世紀前半・7世紀後半）、遠願寺址東・西三層石塔における四天王像、羅原里五層石塔出土舍利容器における四天王像（8世紀後半）、国立慶州博物館蔵石塔部材（2基）における四天王像（8世紀後半）などが挙げられる。これらの作例の台座の形式をみると、邪鬼あるいは山羊の上に乗るタイプと、岩の上に立つタイプの二種類が確認できる。また、持物については宝珠や金剛杵、宝棒など幾種のもを有するタイプと、多聞天以外の四天王が剣のみを有するタイプが確認でき、四天王像の図像が韓国に伝えられた初期段階においてすでに2種類以上の図像が受容されていたことがわかる。しかし、それは『陀羅尼集経』のような四天王の図像について説く経軌からは見出すことができないものであり、当時中国には別系統の図像が存在したか、統一新羅において四天王像の図像に関する再編成が行われた可能性が高いと思われる。

9世紀以降になると石塔や舍利容器の他、石灯と浮屠などに四天王像を設ける作例が登場する。統一新羅の仏教は慶州を中心に華嚴思想が主流をなしていたが、9世紀前半以後王権が弱まり、地方の豪族が力を増すにつれて慶州以外の地域において禅宗が広がりを見せる。高僧の舍利を納めた浮屠は、禅宗において石塔のような意味を持って尊重され、石塔の伝統を受け継ぎ、浮屠を守る守護神として四天王が選ばれたと思われる。しかし、そこにみえる四天王像の図像は、多聞天が主に右手で宝塔を捧げる図像が用いられた8世紀までとは異なり、左手に宝塔を有するものが多くみられるようになったことや宝塔を持たない多聞天がみられることなどから、新しい図像が受容あるいは編成されたことが窺える。

本発表は、特定の経軌に従わず、多種多様な図像を用いて造像された統一新羅時代の四天王像を網羅的に考察することによって、韓国に伝わった初期の四天王の図像とその図像の展開について検討するものである。